平成２８年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名	福井県

Ⅰ　概要

１　事業の概要

本県では、平成30年の福井国体・全国障害者スポーツ大会の開催を控え、両大会を契機に県民一人ひとりがそれぞれの体力や目的に応じて、様々な形で生活の中にスポーツを取り入れ習慣化できるよう、体験の場を拡大しスポーツを通した交流を推進している。障害者スポーツにおいても、競技者・指導者を招き、障害者が練習方法の講習や試合などを体験してスポーツに親しむ機会を増やしている。

県内の特別支援学校では、ゴールボールやボッチャなどの障害者スポーツを通して障害のない児童生徒の障害理解を促す場としたり、スポーツが障害のある児童生徒たちの人生を豊かにするものであることを知ってもらったりした。また、卓球やバトミントンなど一般の競技種目と同じルールの下で勝敗を含めて一緒に楽しむことで、相互に理解する機会となった。

２　事業の成果

盲学校では、中学部と近隣の中学校が行っている交流及び共同学習の一環としてゴールボールを実施し、高等部生徒が指導者役を担当した。指導者役を高等部生徒が務めたことで、生徒同士の関わりが増えた。指導者役を担当した生徒は、当日までの事前学習として、ゴールボールの歴史について調べたり、指導方法やコツを整理したりしながら指導計画を立てた。交流及び共同学習後は、「言葉で伝えることに苦労したが、説明がうまくできたときは嬉しかった」と振り返っていた。

ろう学校では、女子卓球チームが全国大会で準優勝するなど実力を備えており、中学校や高等学校の生徒と同等に競技を行うことができることから、技能の向上の目的も含めて、障害者アスリート等による技能講習や交流試合を行った。他校の生徒とペアを組んで合同練習を行ったり、同じ学校同士が対戦しないように試合を組んだりすることで、互いに交流を図ろうとする姿が見られた。特に、混合チームを編成して団体戦を行った際には、試合中にチームメイトを応援するなど連帯感が生まれていた。高等学校生徒は、最初は接し方が分からず消極的な様子であったが、練習や試合を通して、徐々に打ち解けていくことができた。ろう学校の生徒のことを「聴覚障害があっても、卓球という同じ土俵で対等に渡り合える同世代の仲間だ」というコメントがあり、理解の深まりが伺えた。今後も継続して交流を行っていく予定である。

県内の知的障害特別支援学校(6校)が集まり日頃の練習の成果を発揮する場として、また技能や勝敗を競い合う場としてスポーツ交流大会を開催した(ソフトボール、バトミントン、バスケットボール)。技術面の向上を図るだけでなく、スポーツを楽しむ機会でもあることから、高等学校生徒等の参加を得て開催することとした。平成28年度は、ソフトボールに21人、バトミントンに21人、バスケットボールに23人の高等学校生徒が参加した。練習や試合を通して、高等学校生徒の技術や練習内容を知る機会となり、特別支援学校の生徒の中には、高い技術の習得を目指す生徒も出てきた。高等学校生徒等にとっても、同じスポーツをしている特別支援学校の生徒と一緒にプレーしたり、言葉を交わしたりする中で、障害のある生徒の協議に対する意欲の高さや障害について知る貴重な機会となった。

３　事業の課題とその解決のために必要な取組

・継続的な交流は、前回の経験を生かし交流を深めていく上で有効である。しかしながら、単に同じ学校と継続して実施していくだけでは交流の広がりにはつながらない。できるだけ多くの児童生徒と交流する機会をもつために、これまで交流及び共同学習を行っていない学校を中心に進めていく。新規の学校の場合、小・中学校、高等学校の年間計画に新たに交流及び共同学習を位置づける必要があるため、前年度から事前打合せの徹底を図っていく。

・ゴールボールのように県民にはまだ馴染みのないスポーツについては、小・中学校、高等学校の児童生徒が競技をイメージすることが難しいため、体験する前に説明等の時間を要した。1回だけの交流及び共同学習ではルールの理解のみで十分交流する時間が確保できないため、事前に出向いて体験教室を行うなどの準備が必要である。

・視覚障害や聴覚障害の特別支援学校においては児童生徒数が少ないため、相手校となる小・中学校、高等学校の児童生徒が多い場合、場の雰囲気に慣れないために委縮してしまうことがあった。相手校を選定する際には、学校規模も考慮に入れて市町教育委員会等と連携しながら決定していく必要がある。交流及び共同学習の計画や実績について市町教育委員会とも検討及び情報を共有していく。

・学校間交流の活動内容については、特別支援学校だけでなく小・中学校、高等学校の状況を考慮しながら検討することになる。スポーツ交流としてボッチャで交流及び共同学習を実施したが、障害者スポーツに限定することでの難しさを感じた。合奏や共同作品制作など文化芸術活動も含めて自由に活動を決めていけるとよい。

・長年継続して行っている学校においては、スポーツや文化芸術活動など様々な活動を通して、関わり方に児童生徒の成長が感じられたり、会話が弾む場面が見られたりするなど、成果について検証していく。

・これまで、ろう学校は聴覚障害があるものの運動能力の高い生徒が在籍していたため、高等学校の卓球部と練習試合を組むことができていた。しかし、障害の重度･重複化や部員の減少のため、高等学校との部活動における交流及び共同学習の継続が困難な状況にある。次年度以降、相手校の選定や活動内容を検討して互いの理解を深められる形態を模索していく。

・特別支援学校を会場として交流及び共同学習を行うことが多かったが、高等学校を会場として実施してみたところ、行き慣れない場所での活動への抵抗感から、特別支援学校の一部の生徒が参加を渋り活動できなかった。高等学校の他の部活動の生徒への波及効果など高等学校を会場とすることのメリットもあるが、活動場所については児童生徒の実態に応じて検討する必要がある。

・大きい集団で交流及び共同学習を行う場合、大会運営の関係上、交流を深める時間を十分に確保することができなかったため、一部の児童生徒に限られてしまった側面もある。事前に手紙のやり取りなど間接交流の時間を設けて、ある程度互いを理解して当日の活動に臨めるように工夫が必要である。事前に学校紹介などを行う取組を進めているが、1回だけの交流及び共同学習の場合には、日程調整に課題があり実施できないことが多かった。